

第227回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

イスラエル、ハマスの戦闘状態やウクライナ、ロシアの戦いに、奪い合うことから逃れられない宿命というか、人間の業のようなものを感じます。とはいえ即刻、戦争は止めて欲しいです。こんな顔をしかめる戦争の話とは別に、自然と笑顔になってくる話題もあります。大谷翔平選手のドジャースへの入団と、プロスポーツ過去最高の契約金獲得というニュースです。毎日のように賑やかな話題を提供してくれています。スーパーマン大谷選手は、右腕手術後のリハビリというリスクを抱えながら、何か希望というか、元気を私たちに提供してくれています。大谷選手の来シーズンの更なる活躍を期待します。

12月の句会ですが、投句では今月もメンバー全員18名の句が、それぞれ3句ずつ、合計54句が揃いました。そして対面句会は12月14日（木）に、新橋ばる一んに下述の9名が集まり、実施致しました。

○ 今月の兼題

当季雑詠（冬の句三句）

○ 投句参加者（18名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○ 対面句会参加者（9名）

創風さん、和感さん、明峰さん、栄女さん、柴楽さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

今月のディスカッションは、先月から懸案事項になっている「句会の季題、春、夏、秋、冬の期間の区切り」について、おさらいをし、「道草」としては、下述の通りとすることに致しました（暦は2024年を例にあげました）。

春 立春の日から立夏の前日まで・・・ 2月4日 ～ 5月4日

夏 立夏の日から立秋の前日まで・・・ 5月5日 ～ 8月6日

秋 立秋の日から立冬の前日まで・・・ 8月7日 ～ 11月6日

冬 立冬の日から立春の前日まで・・・ 11月7日 ～ 2月4日頃（翌年）

そしてもう一つ、確認し合いましたことは、「せっかくルールを決めても、参加している皆さんが選句をするときに、これを守らなければ意味がない」ということでした。そこでもう一度、「決めたルールは守り、俳句を楽しみましょう」ということも確認し合いました。

今月の最多得票賞（☆印）は、7票を獲得した明峰さんの句「生き抜きし喜びもあり十二月」と、晶如さんの句「冬紅葉浮かべ社の花手水」でありました。お二方の句に込められた矜持と美意識を、どうぞよく鑑賞していただきたいと思います。

「道草」では、まずは天賞の栄誉が一番ですから、これを尊重し、最多得票賞は3位までとし、票数が同数である場合は、その票数を獲得した人までということにしています。天賞は獲得できませんでしたが、今回は次位の獲得票数が4票であり、明峰さんとまさあきさんの下述の句が☆印になりました。

| | | |
|--------------------|-----|------|
| ◎『生き抜きし喜びもあり十二月』 | 明峰 | 天2☆7 |
| ◎『みかん剥く小さき指にリズムあり』 | 栄女 | 天2㊦3 |
| ◎『年の瀬の変はり身速し商店街』 | 和感 | 天2㊦2 |
| ◎『冬紅葉浮かべ社の花手水』 | 晶如 | 天1☆7 |
| ◎『ざくざくと白菜を切る鍋支度』 | 歌多音 | 天1㊦3 |

| | | |
|--------------------|------|------|
| ◎『大砂丘のぼれば遠く小春風』 | 萩女 | 天1㊦3 |
| ◎『短日やペンキ剥がれて基地の街』 | 晶如 | 天1㊦2 |
| ◎『十二月猫はゆつくり歩きをり』 | 多佳 | 天1㊦2 |
| ◎『独寝の豆炭あんか夢の中』 | 錦流 | 天1㊦2 |
| ◎『伝はらぬことの多さよ日記了ふ』 | 白然 | 天1㊦2 |
| ◎『餅切るは俺の役目と夫のいふ』 | 多佳 | 天1㊦1 |
| ◎『山茶花の狂ほしいほど散り咲きぬ』 | まさあき | 天1㊦1 |
| ◎『歳末の宝くじ道人師の笑み』 | 一光 | 天1㊦1 |
| ◎『ふるさとの兄干し給ふ蒲団かな』 | 萩女 | 天1㊦1 |
| ◎『大根を煮る何がなし亡母恋ひし』 | 月草 | 天1㊦1 |
| ◎『冬刻む人なく動く観覧車』 | 明峰 | ☆4 |
| ◎『ガザ瓦礫色は匂はず冬紅葉』 | まさあき | ☆4 |

今月の投句中、ディスカッションの対象になり、討議された句と討議の内容について披露致します。まずは歌多音さんの句「ざくざくと白菜を切る鍋支度」です。この句には季語が二つあります。「鍋支度」（鍋支度は鍋料理の類語）と「白菜」です。白菜がざくざくと切られていく手際の良さ、リズムカルな音まで聞こえてくるようです。出来上がったお鍋は、温かくきつと美味であることを読者に想像させます。この句では主役の「鍋支度」に対して、白菜はざくざくと切られることでこの句を引き立てています。こんな面倒さがあるからでしょうか、これまでは「季重なり」と言って、「初心者のご法度、一つの句には一つの季語の句を詠もう」と言われてきました。今後もこれは無難と思いますが、名句と言われる「季重なり」句で、勉強することも良いのではないのでしょうか。

次に太田一光さんの句「歳末の宝くじ道人師の笑み」が、話題になりましたが、道人師に戸惑われた方もあったようでした。住田道男先生がお元気なときは、年末の句会の冒頭に宝くじを私たちに配られて、ジャンケン・ゲームで勝った者から、当たれば景品として頂く場合もありましたし、その場で硬貨を使い隠されたところを削り落とし、賞金が当たるかどうかを楽しんだこともありました。懐かしいですね。

そして句の方ですが、俳句を5、7、5で詠まず、この句の形は上を8音、下を9音、合計17音で詠むことを、テレビ番組「プレバト」から教わりました。一光さんの句では上の部分が10音、下の部分が8音の「字余り」の句になっていますが、良い句が頭にひらめけば、この形での句にも挑戦してみたいものです。

もう一つ白然の句「伝はらぬことの多さよ日記了ふ」は、下五「日記了ふ」が、季語になるかどうかで、議論になりました。白然は投句するときに、季語として使っている実例があると、調べたつもりで居りました。句会で指摘を受けて、帰宅し調べましたら、大間違いでした。自分に都合のよいように考えるものです。この句も「日記了ふ」と詠んでいると思った句は、石塚友二作「余白多き古日記とはなり了す」というものでした。この句の季語は「古日記」であり、「日記了ふ」ではありません。以後の学習姿勢を変更しようと思感致しました。その後、もう一句こんな句を発見しました。「三行の日記で了る花火の夜」です。この場合は「花火」が秋の季語ですね。絶対に自分の都合のよいように考えたり解釈したりしないことですね。以後は小生の句も、下五を季語である「日記果つ」に推敲することにします。

今年はみなさんともうお会いすることもございませんが、来年はまた元気にお会いしましょう。皆さま、どうぞよいお年をお迎え下さい。

白然記